
魔法少女リリカルなのは 八神家の弟

子竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 八神家の弟

【Nコード】

N4955U

【作者名】

子竜

【あらすじ】

みなさんこんにちはは八神 葉です。8年前に気が付いたら転生してていつの間にか八神家に引き取られ『リリなのは』の世界だと知りました。だって目の前に姉と名乗る一つ上の八神 はやてさん本人がいたんだから。

不定期投稿です。

第1話 出会って本当に突然だよね。(前書き)

初めて書く二次小説です。

キャラが全然違ったりするかも知れませんが。

とりあえず最後まで読んでくれたらうれしいです

第1話 出会って本当に突然だよね。

葉Side

みなさんこんにちははやての弟、八神 葉です。突然ですが目の前にデバイスがいます。3機です。そのうち2機がユニゾン機でもう一つがインテリジェンスデバイスです。

なんでこんなことになったかと言うと丁度1時間前にさかのぼる

今日は学校が休みでいつものように筋トレとかしてはやての作った料理を食べて食器洗って洗濯物干して、とりあえず自分の部屋に入ったら机の上に見慣れない子供がいて「子供じゃないよ。神様だよ」とか言ってる

「君どこの子？おうち分かるかな」

「だから子供じゃないって言ってるのに。」

「名前わかるかな？どうしてここにいるのかな。」

「う。。。」

涙目って泣いてる！

「ごめんごめん。神様」

「え？、初めて人間にちゃんと神様って言われた。大体の人が神様バカっていうのに。ありがとう」

「かわいそうだね。で神様なんでこんなところにいるの。それとな

んで俺がこの世界にいるのか聞きたいんだけどいいかな」

「うん実は・・・・・・・・・・・・・・・・・・ということなんだ」

「なるほど要するに神様の手違いなんだね。なら俺はこれからこの世界で生きていくよ」

あのところにはもう戻りたくないからね。

「だから葉君にこの世界にある三つのデバイスを持ってきたんだよ。ちなみに葉君の魔力はSSSオーバーだからね。それじゃあね。あ！この世界の未来についてはまだ決まってるからね。バイバイ。」

そう言っただけで帰って行った。机にはデバイスらしきものが確かにある。でも何でブレイブルーの十六夜の帽子が数十個あるのさ。なんで全部こっちを見るのさ。ものすごく怖い。なんやかんやでそれをかたづけたら1時間。

目の前にデバイスがいます。とりあえず

「起動」

とりあえず言ってみる

起動します

起動しました。

「はじめまして」

とりあえずあいさつ

「はじめましてマスター」「はじめまして

デバイスに自己紹介をしてもらう

「私達はロストロギア『審判の書』の管理者人格です」

俺はただのデバイスだ。我々には名がない

「マスターに知っていてももらいたいことがあります。」

「一つ あなたが初めてのマスターであること

「一つ あなたには初めに守護騎士プログラムか自動防御プログラムか選んでもらうこと

「一つ 我々はあなたのご命令には必ず従うこと

「一つ あなたの魔力を少しずつ使っていること

「一つ いつでも破棄することができること」

「そうなんだ。いいよ」

「え?!」「」

「あ、そうだ名前をあげるよ。

右からあかり、アルマ、ソウル・オブ・ランゲージどうか?」

「うんとってもいいよ。ありがとうマスター」

「ありがとう」

感謝する

こうして新しい生活が始まったのでした。

第1話 出会って本当に突然だよね。(後書き)

難しい。

ブレイブルーの十六夜の帽子全部こつちを見てたらものすごく怖いと思う。

こんな感じでこれからも続けていきたいと思います。

水樹奈々さんの Cross Wish を聴きながら書きました。

これから 感想・質問・アドバイスなどお待ちしています

2話 プログラム決定（前書き）

今回は短すぎです。

2話 プログラム決定

新しい家族とあいさつして名前をあげました。

「葉。それでプログラムはどうする？」

「守護騎士で。後プログラムはやめて。みんな家族なんだから。」

「！うんわかったよマスター。」

「アルマは？」

「分かった。」

「ソウルもな」

承知した

「マスターじゃあ新しく名前を決めてあげてよ」

「え？名前決まってるないの？」

「あなたが初めてのマスターだから」

「そうか、それでその人は？」

「ここにいます」

「え？いつ出てたの」

あかり自分達のことなんだから気付けよ

声のした方を向くとカツコイイ部類に入るであろう女性がいた

「ミストラルどうかな」

直感で頭に浮かんだ。

「ありがとうございます」

「葉お昼やで。早く下りてきてや。」

はやての声が聞こえる

「うん今行くよ」

「葉、今のは？」

「アルマ、たぶんマスターの家族だよ」

「あかり、正解。今のは俺の姉さんだよ」

「.....」

「あれ？ミストラルどうしたの。」

「いえ 私はあくまでプログラムなのでしゃべる必要などありません。」

「何言ってるの。俺たちは家族なんだからいっぱいしゃべろう。仲良くなるろう。」

「しかしわたね。ミストラル」・・・はい主

なんやかんやで下に降りた。

「はやて「姉ちゃんや」「うん姉ちゃん」

「なんや。ってその人たち誰や。」

聞いてきたときははやては少し怖かった

聞かれたのであかり達のことを説明する。

「・・・というわけなんだ。姉ちゃん」

「そうなんか。ならよろしくな。みんな

「「「「はいよろしくお願いします」

はやての顔はとても嬉しそうだった。

2話 プログラム決定(後書き)

決まったので少し載せておきます

人物設定

名前 八神 葉

年齢 8歳(はやての二つ下)

目 紺色

髪 黒

顔 女顔(女装しても全く違和感がない。例え男だと言っても信じて貰えないほど)

特技 格闘(武器無し) 料理 その他いろいろ

魔力 Cランク(あかりとのユニゾン時AAランク、アルマとのユニゾン時AAAランク)

デバイス 審判の書 ソウル・オブ・ランゲージ(以後SOL)

好き 家族、友達 動物

嫌い 家族をバカにされること KY

名前 あかり

目 茶色

髪 茶色のツインテール

顔 (ジュエルペット ていんくるを参照)

魔力 Aランクオーバー

好き 葉 仲間 はやて 甘いもの

嫌い 辛い物 怖い話

名前 アルマ

顔など (ジュエルペット ていんくるを参照)

魔力 AAランクオーバー
好き 葉 あかり はやて
嫌い 葉に害をなすもの

名前 ミストラル

目 水色

髪 黒に近い赤

顔 カッコイイの一言

特技 剣術

好き 葉 「家族」という言葉

嫌い 家族に害をなすもの

あかりアルマどちらもジュエルペット ていんくるの登場人物に似ているだけ

こんな感じですか。どうでしょうか。設定って考えるととても楽しかったです。

では

感想や質問、アドバイスなど待っています。

第3話 初めてのユニゾン(前書き)

連続投稿です。がんばりました。

第3話 初めてのユニゾン

あかり達と初めて出会ってから1週間たった。

最初みんな俺を女だと思っていたらしい。男だっと思ってても「」「」
嘘だ！！！」「と言われた。

「マスター。ユニゾンしよう。」

「葉。 やろっ」

調整も終わったしな

「ソウル。調整って？」

お前との相性をあげるようなものだ

そんなことしてたんだ。

「まずは、私だよマスター。」

いきなり！まあいいか

「「ユニゾンイン！！！！」」

安定してるな。これなら事故も起きないだろう

「そっか。じゃあ解くよあかり」

「うん マスター」

「「ユニゾンアウト」」

「次は私だ。葉。」

「「ユニゾンイン！！」」

こっちもいいな

「「ユニゾンアウト」」

「主。これからけいこの時間です。」

え？もう「うんわかった。あかり、アルマ。明日からは魔法の訓練
をしたいんだけどいいかな」

「うん」「ああ。いいよ」

「では行きますよ主」

庭に移動

「はああああああああああ」

「わきが甘い！」

「ぐはあ」

「それでは一瞬の内にやられますよ。」

今 木刀で剣術の手ほどきをしてもらってる。

「これでどうだあああ」

ミストラルの懐に素早く入り斬った。そのはずだった

「狙いはいいですがまだまだですね。」

そう言い終わると同時に木刀で吹っ飛ばされた。

そのあとは向かってはやられの繰り返しだった。

1時間経過

「葉、ミーちゃん。麦茶入ったで」

「姉ちゃん。ありがとうございます」

「ありがとうございます。はやて。主、剣はこれで終わりにしましょう。少し休憩したら組み手にしましょう。」

「ミーちゃん。葉はどうなんや」

「いい感じです。1週間でこれだけ出来ればすごいです。」
「なんか照れるな。」

「ねえ。はやてご飯まだかな？」

「あかり？さっき朝ご飯食べたばかりだろ」

「う、うんでもおなかすいちゃって。あはは」

「主 そろそろ始めましょう」

「うん。わかった。あかり。冷蔵庫にプリンあるから食べていいよ」

「！！！！ありがとう。マスター」

そのあとミストラルと組み手をした。ミストラル曰く武器なしの方が強いらしい。

ちなみにプリンは俺が作った。

葉 話がある。いいか？

夜みんながお風呂に入っているとき突然話してきた。

「いいよ なに？ソウル」

あかり達についてだ。前に『審判の書』はお前の魔力を使っていると云ったが実は今はまだ使っていない

「え？どうして」

使っていないはおかしいか。正確には使えないだ。原因は2つ
お前は特殊なりミツタ がかかっている。使える魔力はAランクだ
ろう。この状態で使ったらあつという間にゾンビみたいに干からび
る。俺たちにそれを解くことはできない。
もう1つは・・・後で言う

「なん「出たで。葉」出てきたんだ。あかり アルマちょっと来て」
「いいよ マスター」「うん わかった」

~~~~自室に移動~~~~

「で、2人ともどうして言ってくれなかったの」

「えっと、その、心配かけたくなかったんだよ」

ふぎけるな

「ソウルが言ったんだな。どうして」

限界だろみんな

「でも「でもじゃない！あかり、アルマ 俺たちは家族なんだ。つ  
らいことがあるならいつでも打ち明けていいんだよ。俺に出来るこ  
となら頑張るから。」 葉。」

本当にいいんだな。なら今からあることをしてもらおう

「な？ソウル！！」「うんいいよ」「よくない！」

「とても危険なことなんだよ。失敗したらマスターがしぬかもしれ

ないんだよ」

あかりとアルマを無視して進める

わかった。それじゃあ今からあかりとアルマと同時にユニゾンしてもらおう。もちろん安定しなかつたら事故が起きる

「わかったよ。．．．あかり アルマ行くよ」

「もう わかったよマスター」「仕方がない。葉．．．．．」

息を整える

ソウルが結界を張る。

「ユニゾンイン！！！！！」

「ぐああ．．． な何これかなりきついな。はあ はあ それで．．．ソウル．．．この後．．．どう．．．すればいい？」

お前はそのまま耐えている。．．．システムA『インストール』開始

「(ソウル早く！このままじゃマスターが！)」

わかっている．．．61% 63% 65%．．．

「クツ 俺はだい．．．じょうぶだ．．．から」

「(葉 しゃべるな。ソウル！)」

88% 89% 90% ここだ！葉 魔力を俺に込めろ

俺は今出来るだろう、最大の魔力を込めた

「わか・・つた。うおおおおおおおおお」

100%！『インストール』完了。全データallclean  
システムAを終了する。

「はあ はあ はあ。少し楽になった？」

これで何とかなる。葉、今やったのはシステムA。俺の中にあるものだ。強制的に主と融合騎を同一化し、少ない魔力で維持できるようにする。しばらく時間はかかるがこのユニゾンも実用的に使えるようになる。今のお前の通常時の魔力はcランクだ。しかしこの状態ならsランク。リミッタ が外れたら測定不可になるだろう。

こつて

「ユニゾンアウト」

「だいじょうぶ？マスター」 「平気か葉！」

「ありがとう。平気だよ。これで2人の負担は減るのかな？」

「うん。ぐすん・・・ありがとう。マスター」

「ありがとう、葉」

「そ……つか。よ……かつ……た」

俺はそこで意識を手放した。

### 第3話 初めてのユニゾン（後書き）

「作者、お前何してるの？」

いやー勉強しないで投稿しました。

「わかってる？赤点取ったら、夏休み補習だよ。」

はははは、暑いね今日は

「ごまかすなよ」

ごめんなさい

「まあいいや。それより読者の皆様にお問い合わせがあるんですよ。」

はい。そうなんです。実は葉の技名、ほかのキャラの技名がまったく言っていないほど決まっています。

「ほんとに何してるの、はあ。それで作者は読者のみなさんに考えて欲しいそうなんだ」

全部使えるかは分かりません（主に作者の文才の無さから）。でもがんばりますから、どうかお願いします。

では

「感想・質問・アドバイスも」

待ってます

「待ってます」

第4話 あ、淫獣の声だ!!! (前書き)

全然原作に入ってません。

テスト受けて惨敗の感覚があります。

書いてました。勉強しないで。

#### 第4話 あ、淫獣の声だ!!!

皆さんこんにちは葉です。夢見ました。で、声聞こえました。

え？あの後どうなったかって？・・・あかりが教えてくれるみたいだよ

あかりSide

マスターが気絶しちゃってとても焦っちゃった

「マスター？・・・」

心音を聞いたら少しずつ弱くなるのが分かった。

「マスター!!!!」

私はわかっただけ。どうすればいいかなんてわからない。

あかり？どうした!!!

「マスターが、マスターが死んじゃう」

ク、やはりか。負担をかけ過ぎた。アルマ、俺を使って回復魔法使え。

「ああ、分かった。葉おまえは私が絶対に死なせない」

アルマが魔法を掛けようとしてる。ああ私は無力だ。初めて出来たマスター1人助けられないなんて。ごめんねマスター。

「なんだ！これ。鍵？」

アルマが何か驚いてる。なんだろうと私もマスターを見る。

そこには確かに鍵があった。

「何・・・これ」

私は目覚めて少ししか経ってない。でもこんな怖い鍵を私は見たことない

怖い・怖い・怖い・怖い・怖い・怖い・怖い・怖い・怖い

俺を葉につけて、この部屋から出る2人とも

「ソウル？」「どういふこと。ソウル」

いいから早くしろ！！！！

私達はビククリして言われたとおり部屋から出た。

私は緊張の糸が切れたのかドアの前で座り込んでしまった。

アルマは操り人形の糸が切れたように気絶していた。

葉 Side

でそのあとどうなったのかはソウルに聞いた。あかり達がいないと

ころで。

ソウルがそうしろと言ったからだ。

「で、どうなったの。ソウル」

ああ。・・・まず最初に誤っておく。すまなかった

目を閉じて誤ってきた。いや目があるかは分からないが。

『インストール』の内容を見たら分かったんだがどうも余計な物までやってしまった。通常の生活では問題はない。しかし、この間のように魔力が尽きたとき、周りから魔力を吸い取る。敵味方関係なく。最悪主も食いつくす。『大罪の書』が入っていた。

「なんだそんな事。心配して損したよ。現在進行形で寿命を奪われてるとかだったらビックリするけど。ようは俺がちゃんとしてればいいんでしょ」

いいのか、そんな簡単に。・・・いや分かったもうこれいじょうは言わない。

うんやっぱりソウルはいいやつだ。

こんなことがあって冒頭に戻る

気が付いたらフェレットの姿で主人公達と女湯に入ったあの男の子

の音が聞こえました。

「マスター何か聞こえたよ。」「放っておくのか」 必死だったぞ

「いいんだって、みんなも気にしないで。」

「主。学校に行くまでにはまだ時間がありますし、組み手をしまし  
よう。」

まあそんなこんなで原作開始を思い出しながら、ミストラルと組み  
手をして学校に行く。

ちなみに引き分けた。

~~~~~学校~~~~~

「ねえ葉ちゃん。この服可愛いでしょ。葉ちゃんに会うと思うっ」

今丁度休み時間でクラスの女子が話しかけてくる。

ちなみに今見てるのは女物の服。

俺にどうしろと？

『着てほしいんだ』（女子全員）

な！！！心読まれた。こいつら読心術でも使えるのか？

『うん、葉ちゃんのためにたくさん練習したんだよ』

キーンコーンカーンコーン、キーンコーンカーンコーン

「おい。お前らどうした？授業始めるぞ。」

『……い……そ……さい。』

「ん？なんだって」

『だから、先生今日早退させてください。』

「お前ら、バカなこと言っていないで早く教室に入れ。ほらほら」

『い、いや』

なんだ外が騒がしいな。

『さあ葉ちゃん。お着替えしようか。ねえ』

「拒否権は？」

『無いよ。』

「チャイム鳴ったしさ。」

『気にしない、気にしない。さあ。まずはメイド服からね。』

いや

あ、
また聞こえた。

第4話 あ、淫獣の声だ!!! (後書き)

前回到続いて、葉の技名のアイデア待ってます。

感想なども待ってます。

神様たち登場（前書き）

今回出る神様は

緋弾のアリア〜4度目の人生にも出ています

神様たち登場

「こんにちは!!!!!!」

目の前に神様がいる。

「主、この子は誰ですか?」「マスターの知り合い?」「葉 どうなんだ?」

どう言えばいいかな。神様?子供?うーん

「3人とも、私は葉君の彼女だよ」

「「「「な!!!!!!」」」」

「というのは冗談で、ちょっとした知り合いだよ」

「そうですか。主私は少し出かけてきます。」

「え、そうなんだ」

「マスターその子に何かされたら言うてね」

「う、うん」

「葉 私はもう少し眠っている」

「うん、分かった」

3人とも行ってしまった。ちなみにここは玄関の前、朝の4時

「それで何の用なの神様」

「うん、何で魔力がこなのかなって」

ん？

「私言ったよね。あの帽子には葉君のリミッターを外す効果があるって」

「え？言っていないよそんな事」

「嘘だー、私ちゃんと言ったよ。」

「聞いてないよ俺そんな事」

「言ったよって電話だ。はいもしもし・・・」

神様を取り出したのはかなり古い黒電話。音はしなかったが

「うん・・・え、ウソ。うん、うん分かった・・・じゃあね・・・」

ごめんね葉君私の勘違いミたい。でも伝えたからもう大丈夫だよね」

「えっとそんな大事だと思わなくて全部処分しちゃった」

「えーーーーー！どうしよう」

かなり動揺してるよ神様。

「葉君……あれをもう一度持つてくるのに最低でも三ヶ月はかかるよ」

「どうしよう……」

「そうだ!!!私でも少しならリミッター外せるよ!!!今から外すよ」

ポンおなかをたたいてきた

「はい出来たよ。これでなんとかBランクは出るよ。でも一定量以上魔力を使うとまたリミッターがかつちゃうから気をつけてね」

「具体的にどのくらい。」

「うーん。飛行魔法と砲撃魔法を同時にユニゾンしないでやるくらいかな。でも飛行魔法だけなら幾らやってもだいじょうぶだよ。」

なんかすごく少ないな。2期の内容知らないんだけどだいじょうぶかな。

「よし行こうか。葉君。」

「え?行くってどこへ」

「天界。ブレイカーさんがまつてるよ。」

「てんかい?というかブレイカーさんて誰。」

「えっとね、ゼウスさんとスサノオさんの戦友。とっても強いんだよ。」

「へー。そう言えば神様の名前は？」

「ユンデリア＝ルイベ＝モノメス。みんなにはユーって呼ばれてるの。」

「そうなんだ。でどうやって行くの。」

「目を閉じて。」

「うん」

「・・・はい着いた。」

「え！？うそ。本当に風景が変わってる！」

「これでも神様なので」

ととととユーが歩いていく。

俺も後についていく。

やがて広間に出た。

「来たかユー」

「遅かったわね。ユーちゃん」

「わしは今あまり暇ではないのだぞ。」

三人の男女がいた。

「スサノオさん、ブレイカーさん、ゼウスさんお待ちせしました。」

「お前名前は？」

「八神 葉です」

迫力で生き物を殺せるんじゃないかっていうほどの気配のスサノオさんが聞いてきた。

「八神か。俺はスサノオ。よろしく」

「私はノエル・ヴァ「まじめに言え。」「ぶー。分かったわよ。改めて私はブレイカー。」

「わしはゼウスじゃ。」

ゼウスさんは何で女性なのにそんなしゃべり方なんだろう。

「じゃあ殺ろうか葉君。真剣勝負。」

「ブレイカーさん字が違いますよ。」

「それにまず八神のリミッタを外するのが先だろう。」

「そうね。」

ブレイカーさんが俺の肩を叩く。

「外したよ。改めてやろうか」

「これをつけて葉君。」

ユーがソウルを渡してきた。

「それは「コピー」じゃよ」

「はやく準備して。」

「セットアップ。」

s t a n d b y r e a d y

俺の初めての実践相手はブレイカーさんだった。

この部屋には俺、ブレイカーさん、スサノオさん、ゼウスさんしかない。

神様たち登場（後書き）

神様たちの強さはゼウス、スサノオ、ブレイカー、ユーの順番です。

ブレイブルー好きの神様

「セットアップ。」

s t a n d b y r e a d y

「では、俺が合図したら初めだいいな。ブレイカー、八神」

「ええ。」 「はい！」

スサノオさんが一呼吸おく。

「はじめ！」

俺はこの勝負、長引かせると不利だと思った。

バスターモード

俺の考えてることを読み取ってソウルコピーは行動する。

「行くよ。ソウル！カートリッジロード」

ロードカートリッジ

俺はソウルに教えて貰った必殺技を出す。

「いきなり！いいよ面白い。私の砲撃とどっちがっよいか、」

「ジャッチメントブレイカー！！！」

「勝負だよ。はあああああ!!!」

俺の銀色の砲撃とブレイカーさんの黄緑の砲撃がぶつかる。

「あの色!・・・やはりかのう。」

「分かっていたことだ。」

「はああああああああああああああああああああああ!!!」
「!」

砲撃は相殺され、俺はその衝撃で後ろに吹っ飛ぶ。

「相殺されちゃった。」

リアルファイトモード

俺はグローブになったソウルコピーで吹っ飛んだ勢いを殺さずブレイカーさんから離れる。

「もう一発行くよ、葉君。そうだ!ヘルズファンク」

「ってそれブレイブルー!ていうかラグナ!」

俺はあの格闘ゲームの技を使ってきたブレイカーさんをなんとかよける。

10mを一瞬で移動してるよあの人。しかもゲームで見たラグナよりも早い!

「まだだよ！デッドスパイク。」

いちよう言っておく。あの人も持ってない。

「ツク！ソウル！」

プロテクション

なんとか防ぐがひびが入る。

「つぎ行くよビックバンスマッシュ。」

「な、もうためてる！」

ソウルコピーが頑張ってるが破られるだろう。おれは腕を交差させ
衝撃に備える。

「星になれ！プラネットクラッシュャー！！！」

「ヒートゲージ関係なしなの！」

俺はそう言っで意識が途絶えた。

.....

スサノオ視点

「このバカが、やり過ぎだブレイカー。」

「あはは。てへ」

「天井は後で直しておくのじゃぞ」

「う、うん」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

俺たちが話していると八神から強大な銀色の魔力があふれ出る。

「ま、まずいぞ。お主がやり過ぎるからじゃ。ブレイカー」

「ど、どうしよう暴走してるよ。」

「魔力充填完了『カミゴロシノハウゲキ』発射」

八神が砲撃を放つ。あれは本当にまずい。

「アマテラス！第二形態発動！！『白雷一閃』」

俺はあの砲撃に対抗しうる攻撃を放つ。

ドドドドドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

なんとか相殺できた。

しかし最低レベルで俺に中級攻撃をださせるをえなくするとは、完全に八神が扱えるようになったらゼウスでもきついんじゃないか。

相殺した時に出た煙がはれるとそこには八神が倒れていた。

ブレイブルー好きの神様（後書き）

今回はブレイカーさんに勝てませんでした。ちなみに葉が覚えてる魔法は、飛行魔法と砲撃魔法ジャツチメントブレイカーあれひとつだけです。勝てるわけがありません。

反省室

ブレイカー「わたし少しやりすぎた？」

スサノオ「当たり前だ。アストラルまで決めるな。」

ブレイカー「それにしても『カミゴロシノハウゲキ』はすごかったな。私にもできるかな？」

スサノオ「それはやめてくれ。」

ブレイカー「冗談だよ。それじゃあ今回はこの辺で」

ブレイカー「感想や質問など待ってるよ」

スサノオ「次回のこの部屋ではもう一人来るらしい。」

ブレイカー「ゲストってこと？」

スサノオ「だろうな。作者にそんなことができればの話だが。」

ブレイカー「スサノオって作者に敵しいよね。どうして？」

スサノオ「なんとなくだ。雰囲気が気に入らない。」

ブレイカー「いい加減だもんね」

子竜「すみませんでした！（土下座）」

「、ありがとう。私を殺してくれて。を傷つけることをしなくてよかった。アミはあなたのことがとっても大好きだったよ。さよなら」

「。。」

俺はこの時なんて名前だったんだろう。思い出せない。

「俺はこれで死ぬのか。ふざけるな。こんな組織があったからアミが。もしこの世界に神と呼ばれるものたちがいるのならば問う。

と。そ

して願う

と。」

「この化け物を殺せ！！！！！！」

いったい何回この夢を見ただろう。俺は何を問い、願いそしてどんな気持ちで死んで言ったんだろう？

中途半端に記憶が有ると大変だなあ。

.....

あれ？ここはどこだろう。

見知らぬ天井、知らない部屋。

俺はどうしてこんなところで寝ているんだろう。

「あ！葉君。目が覚めたんだね。」

「ユー！俺はどうして？」

「ブレイカーさんにアストラルヒートを決められて気絶して」

「・・・あ！そうだ。思い出したよ。」

「二日も寝ていたんだよ。」

「え！二日も！どうしようみんな心配してるかな」

「大丈夫。葉君の世界の時間は私が止めてあるから。葉君今から移動するよ。目を瞑って。」

俺は目を閉じる。「はい着いた。」

だからなんでそんな早く移動できるの？ユー

「八神 来たか。」

「ブレイカーがすまんの。ちゃんと言ったので許してもらえんかの。」

「あはは、ごめんね葉君」

「私は席をはずします」

「すぐに終わるここにいてくれ。」

「これをつけるのじゃ。」

ゼウスさんにペンダントを貰った。

「これは？」

「葉君をサポートしてくれるAI付きの機械だよ」

「大事にしてくれ、八神。その名前はアミだ」

「！！アミって。夢に出てきた・・・」

「それではの。」

「ユーちゃん送って行ってあげてね」

「はい！行こうか葉君」

「う、うん。みなさんさよなら。」

俺は帰って行った。

スサノオ視点

八神のあの魔力は危険だ。最悪自分を壊しかねない。

実際、あの時の砲撃を撃った後の八神の体は傷ついていた。

ゼウスが直してなんとかあったがあんなものを何回も使っていたら死ぬだろう。

だからあのペンダントを渡した。八神の心にいい影響を与えられるといいが。

ゼウス視点

どうしてあんな素直ないい子に。

これほどまでに運命が残酷だと思ったことはない。

前世はとても酷かった。とても正気でいられるようなものではない。

だから少しでも彼にいい影響があるように彼の一番大切な人だったアミに頼んだ。

アミはすぐにOKしてくれた。だからAIに彼女の意識をいれた。

それは建前。本当はあの魔力を彼が使いこなせるように、こちらに危険が及ばないようにするためだった。汚いな

さよなら（後書き）

今回の話は意味不でした。どうしよう。

反省室

スサノオ「今回ゲストに来てくれたのは、原作主人公、高町 なのはだ。」

なのは「はじめまして。普通の小学3年生だった高町 なのはです。」

ブレイカー「あー！魔王だ、魔王だ！」

なのは「魔王じゃないなの！」

ブレイカー「でも、この部屋の前を集まっているのはそう思ってるやつばっかだよ。知り合いがほとんどだったけど」

なのは「少し頭冷やそうか。」

神々「すいませんした！！！」

なのは「スターライトブレイカー！！！」

ブレイカー「おお！みんなかなり遠くまでとんで行ったんだよ。」

なのは「全然出れなかったから少しすっきりしたなの。」

スサノオ「部屋がボロボロなんだがな」

ブレイカー「それじゃあ今回はこの辺で。」

なのは「感想、質問待ってまーすなの」

ブレイカー「ねえ。なのはちゃん。『うるさいなあ』って言ってみてよ」

なのは「なんでですか？」

ブレイカー「お願い」

なのは「はあ。分かりました。……うるさいなあ……これでいいですか」

ブレイカー「うんありがとうー!」

スサノオ「なにしているんだ。」

ブレイカー「梨花ちゃんの声!ー!声優ってすごい!」

スサノオ「そ、そうか(何を言っているんだ。だがここは合わせておくか。)」

ただいま……

ブレイカー視点

ゼウスが何かやってたなあ。

それにしてもユーちゃん時間止め忘れてたよ。

うっかりさんだな。

私も気がついたのはさっきだし、それに私には時を止めること出来ないしね。

しかしあの砲撃はすごかったなー。

もしも本気でやってたらわたしじゃ勝てないよ。

でも強くならないと。

あいつを倒せるようになるまで。

「ブレイカー、ゼウス。お前達はこの後どうするんだ?」

「わしはこの後会議に出ないとならんのじゃ」

「私は何にもないよ。スサノオは?」

「俺は修業だ。いつかゼウスに勝てるようにな。俺は電気しか扱えないからな。それにあの砲撃を全力で撃たれたらさすがにまずいか

らな。受け止められるようになっておかないとな。最悪、この魂を使つてやればなんとかなるだろう」

「そんな事をいう出ない！最悪の場合はわしがなんとかする！だからお主はそんな事をしてなならんのじゃ！分かったな！」

「あ、ああ分かった。心配してくれてありがとう。」

「べべべ、別に心配はしとらん！ただお主がいなくなったら困るからのう。」

ゼウス、もっと素直に言わなきゃ。

そんなんじゃ振り向いてもらえないよ。

それでなくても鈍いんだから。

「スサノオ様、そろそろお時間です」

「毎回言うが様はやめてくれないか。ベスター」

あ、ベスター君だ。

神には大体 天使がついてる。

私はいないけれど。

「いえ、僕は貴方様に仕えている身。そのようなことはできません。それに貴方様にはご恩がたくさんあります。ですからできません」

「相変わらずベスターは堅いな。俺見たくなれよ。」

「タイラ も来ていたのか。なら行くか。あ、そうだ。天井直しておけよブレイカー。」

う……。

「分かってますよ。スサノオなんて嫌い！じゃあね」

私はこの場から早々と立ち去る。

葉視点

「スサノオつたらベスター達の前で言うことないじゃん。……
・おーわった。」

さーて葉君の所でも見てきてブレイブルーでもやってこようかな。

どゆこと？

全然時間止まってないんだけど。

「あれ……。……うん……。葉君」

「どづしたの。ユー」

「時間……。……止め忘れてた。ごめん。えっとほら。」

「なに」

「猿も木から落ちるといっつか、犬も歩けば棒に当たるといっつか、えつとその」

「で」

「あ！そつだ。こつほつも筆の誤りつていっし。許してくれるかなーんて」

「そつなんだ。なら仕方ないね。とでもいっつと思つっ？」

「いえ思いません。ごめんなさい」

「ごめんですんだら警察はいらないつて。」

「はあ。まあ過ぎちやつたことだしね。いいよ。でも今度は失敗しないで。」

「ありがとう！それじゃあね」

「ユ」は瞬きした瞬間いなかった。

「ただいま・・・」

俺がドアを開けると四人の女の子が涙を浮かべていて、怒られた。

「う……正座のしすぎで足が動かせない。」

「これから二日間、うちらとしゃべるの禁止や。」

「少しは反省してください」

「どれだけ心配したと思ってるの?」

「葉、今度そんなことしたらもう話さないからな。それに一生女装だ。」

動かない足を必死に動かして冷蔵庫の所に行く。

「あの、プリンあるよ。」

「」「」「」「」「」「」

「シュークリームもあるよ」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」

俺は基本さみしがり屋だ。

今回はあきらめろ。……そうだ葉。 にして上目使いでい
めんなさいっていつてみる

「うん、分かった。……」「ごめんなさい」

「可憐——」「」「」

ぜひやら許してもらえたらいい。

ただいま……（後書き）

スサノオ「今回もあれだったな」

ベスター「いいんじゃないでしょうか。出ただけでも。」

タイラー「あの作者、もしかしたら続かなくなるかもな。」

スサノオ「あいつはかなりいい加減だからな。」

ベスター「それにしてもスサノオ様は、ホントにお強いですね。」

タイラー「だよな。俺たちがなんとかできる内容のものを余裕になしてるしな」

スサノオ「2人も最初のころに比べればとても成長したと思うが。」

タイラー「またまた。そんなに褒めないで下さいよ。本気にしちゃうでしょ」

ベスター「では、今回はこの辺で。読んでいただきありがとうございます」

タイラー「ありがとな」

スサノオ「感想とか質問を待っている。」

第9話 シルバーさん登場！！！（前書き）

久しぶりです。ああ、最初考えていたものから離れていく

第9話 シルバーさん登場!!!

葉視点

あの後なんとか許してもらえた。

それで今俺の部屋にいるんだけど。

「やあ！この世界の転生者。えつと葉だっけ？……まあいいや、僕は世界の修正力の1つ。よろしく。」

見ず知らずの人が座布団に座ってブレイブルーをやってる。

えつと………通報？

「通報したら、この世界から追い出してやるからよろしく。それと僕のことは親しみをこめてシルバーさんと呼びなさい。」

何で俺の周りの人は心をよむ人が多いのかな。

「葉は顔に出やすいんだ。……P Pもう一つあるからやろう。僕は強いぞ。なんせあのスサノオさんにも勝ったことがある。」

スサノオさんもやるんだ………って違う、何でこんな所にこの人がいるかですよ。

「安心しなさい。葉を排除しに来たんじゃない。少し確かめたいことがあってね。」

今回の依頼を整理しよう。

カミゴロシを正確に測るといふもの。

葉に刻まれたカミゴロシの力がスサノオさんの魂を浄化することが出来るかを確認する。

できる、または将来的に出来るであろうものならばカミゴロシが完成したのちその力を葉から切り離す。

あのゼウスさんでも救うことが出来ないスサノオさんの魂。

「しかし、むごいな。これがカミゴロシ、前に見たものとは違つと分かっていてもそのむごさは変わらない。あの時はその魂ごと消滅させたんだっけ。」

「対象神ニアラズ。修正力ト同一ノ力ヲ確認。主人格ノ行動ヲ制限。『カミゴロシ』ヲ起動。ナオ『カミゴロシノハウゲキ』ハ効果ガ無い。」

「なるほど、分析力も申し分ない。葉を主人格として認識している。これは本当にいい実験体だ。」

「修正力ヲ排除スル。『必要のない剣』ヲ作成攻撃へ移行。」

仕掛けてきたか。

その動きは・・・素人同然!?

「えつと？」

振るってきた剣を軽く避け足をかり転ばせた。

あれ？本当に素人！？

「拍子抜けだよ。」

「……………肉体ノ限界ヲ確認。行動ヲ的確ナモノに変工再行動。」

「っと！今度はいきなり達人並みな動き。だがまだまだ甘い。」

「……………再行動」

「って！さらに動きが変わっていく。」

成長速度が速いのか、元の動きがすごいのかどちらなのだろう。

「まあ、いいのだけれどね」

「……………今ノ動きデハ修正力ヲ排除出来ナイト判断。『必要のない剣』を『必要となることの無い剣』へと進化。歪ミヲ修正、再行動」

さっきまでの剣は特に特徴は無かったけれど、今度の剣は禍々しいほどの怨みを持っているね。

「これはさすがに僕も武器を出してあげよう。」

さて、どうしようか。

初期武器、銅の剣でいいかな。

「少し強化したこれでやろう。さあ、安心してかかってきなさい。君のすべてを否定してあげよう。」

葉視点

頭が痛いな、どうしてだろう。

「やあ、やっと起きたかい。」

「えっと、シルバーさん俺はどうなったの?」

「うん。突然気絶した。」

え?

「それはそうと、葉。この世界で脇役でしかない君はこれから何をした所で過程は違えど最後に行きつくところは同じなわけだ。」

「え?この世界の未来は決まってるんじゃないじゃ。」

「うん、そうだよ、でも脇役でしかない君には何もできない。決して変わらない。」

それってつまり、原作を変えることが出来ない?! ってこと

「そんな葉に僕がサービスしよう。君は『主人公』になりたくはないかい。勝つことを運命づけられた、物語の中心に立つことを運命づけられている。そんな『主人公』に君もなってみないかい。」

『主人公』オリ主

「この世界でも主人公はあくまでもあの3人娘だ。どうする葉。半端な覚悟だと主人公度で負けるぜ。ただでさえ今ここに至るまでに原作と離れているのに」

「え? それってどういう」

「おっと、その事はまだ言わないぜ。僕はそんなにお人よしじゃないからね。今言えることはこのままじゃこの歪んだ世界は最悪なことになる。そこに君という新たな歪みをぶつけてみたいんだ。」

「ぶつけてみたいって」

「僕は世界の修正力ではあるけれどそうじゃない。この世界をなんとかしたいけどしたくない。葉が主人公にならないと困るけど困らない。」

「それって矛盾してるんじゃない?」

「そう! 僕は矛盾したもので・・・ものというのもおかしいかな。」

僕は疲れているし疲れていない

僕は眠いけど眠くない。

僕は動いているけど動いていない。

僕は感動しているが感動してない。

僕は悲しいが悲しくない。

僕は楽しいが楽しくない。

僕は希望を持ってるし持っていない。

僕は絶望を知ってるし知らない。

僕は君を知っているけど知らない。

僕は誰もが干渉できないし出来る。

僕は誰にでも干渉できるけど誰にも干渉できない。

僕はここに存在しているししていない。

僕はここにいないけれどここにいない。

僕は本物だし偽物。

僕は生きているし死んでいる。

僕は死というものがあるし死というものが無い。

僕は誕生しているし誕生していない。

僕は最強だけど最弱でもある。

僕は概念はないしある。

僕は何度も生きているし死んでいる。

僕は世界の歪みやすでに壊れた世界を直すのが仕事だし歪みを作ったり世界を壊したりもする。

僕はどこまでも普通だしどこまでも異常だ。

僕は勝ったことがあるし勝ったことが無い。

僕は負けたことがあるし負けたことが無い。

僕は感情があるし感情と呼ぶものが無い。

僕は好きなものがあるし無い。

僕は嫌いなものがあるしそれが無い。

僕は世界中の様々なことがあてはまるし当てはまらない。

僕は様々な矛盾だ。

分かってくれたかな。

僕の事を少しは？」

「シルバーさんは俺を主人公に出来るし、主人公には出来ない」

「物わかりが速くて助かるよ。さてそれでは原点に帰ろう。君は『主人公』になりたくはないかい。勝つことを運命づけられた、物語の中心に立つことを運命づけられている。そんな『主人公』に君もなってみないかい。」

どっちを選ぶかなんて決まってる。

俺はこの世界で生きていくんだ、オリ主？上等だよ。

このままでは未来を変えられないなら少しでも可能性がある方を選ぶよ。

「・・・俺は『主人公』になるよ、シルバーさん」

「よろしい。なら今度ここに戻ってくる時、君は主人公だ。」

この時のシルバーさんはもの凄いコワイ笑顔でした。

葉視点out

この選択が正史をどんどんと変えていくことになるのだがそれはまだ語られることはない。

カミゴロシ、神ゼウスをも殺せるといふ代物。その力は『修正』。世界のあらゆるものを修正できる。かつていた修正力の1人の魂が形を変えたもの。その魂に会った憎悪が全ての力の源。そういう意味では葉は過去最高の存在。

世界の歪みは本来存在しなかった転生者をもう一人呼んでいた。その者はいふなれば『主人公』である。時雨しぐれ 光矢ひみつやという。めだかツクスの影響を受け「チート付きの主人公になりたい」といふ担当の神が呆れるような願いを言った。担当の神はそれを叶え送り出した、この世界に。こう言つて「・・・それと僕のこととは親しみをこめてシルバーさんと呼びなさい。」と。願いをかなえてもらったチート主人公か、元脇役だった成り立て主人公かあなたはどちらを応援する？

第9話 シルバーさん登場！！！（後書き）

というわけで、主人公ではなかった八神 葉くん。

時雨 光矢というチート主人公を迎えどうなる

葉くんは1番

光矢くんは2番

読者のみなさんお願いです、このアンケート答えてくれませんか。

気軽に感想で、お願いします。

ちなみに光矢くんのチート能力も募集します。

葉くんはこれから矛盾さんことシルバーさんのところでがんばります。

弱すぎると光矢くんは簡単に消えちゃいます。

どうか光矢くんにチート案を。

これホントにお願いします。

作者は全然思いつかないんです。

あ！性格はよくないがなぜか憎めない、いい感じの人です。

第10話 原作知識は参考程度？

シルバーさん視点

今、とある空間（一般的に「都合空間」に属するもの）にいるのだ。

「で、とりあえずどうすればいいの、シルバーさん？」

「さあ？」

「さあってー！」

「そんなに驚く事はないだろう、僕はそんなにお人よしじゃないからね」

それに主人公にする方法なんて知らないのだからね。でも君を主人公にする事が出来る。

カミゴロシの制御の方は後々やっていくことにして。

「葉、主人公だと思う所はなんだい？」

「え？つと……カッコイイとか？」

「それもあるだろうね。仮にそれを一種のカリスマ性として。では他には」

「ライバルとかかな」

「それもいいかもしれないが、その他になんだと思う」

「……………」

分からないか、仕方ないね。

「それは『主人公補正』さ」

「もの凄いリアルな話し来た!!!」

「仕方がないだろう。それにこれは僕の視点からの感想さ」

「そ、それでどうするの？」

さあ？

「とりあえず、ここにいる機械兵から魔物まで全部と相手をしなさい。大丈夫さ、葉にはソウルが付いているだろう」

「え？ってホントだ！全然気が付かなかった。しかもスリープモード」

当り前さ、今ここに呼び出したんだから。

「5時間もしたら迎えに来るから、頑張っておくれよ」

「え、ちょ！待って！」

『さ、やるつ口ボ』

『来るのでアール』

さてあの世界はどうなったかな？

葉視点

『さ、やるつ口ボ』

『来るのでアール』

『がおー、がおがおー！』

『、、！』

オリ主、上等とは言ったけれど少し調子乗ったのがダメだったかな？
それにしてもどれくらいいるんだろう。

葉、ここはどこだ？それにあれらは？

「ソウル！良かった。このまま起きなかつたらどうなるかわかんなかったよ。それでいきなりで悪いんだけど、バリアジャケットを」

？・・・！分かった。セットアップ・・・で、どういう状況なんだ？

そんなこと言っても俺もよく分からない。
いきなりここに連れて来られて、あれ正確にはシルバーさんの作っ

た空間に無理やり連れ込まれたのかな。

主人公補正が主人公にあるなんていきなり言っただけでいきなり戦えなんて付いていけない。

でもとりあえず5時間後に倒れているわけにはいかないよね。

「とりあえずはここであいつらと戦わないといけない。ソウル、大体どのくらいいるか分かる？」

ちよつと待て……機械兵が5000、人？が9000、怪物が10000といったところか。分かるだけではそれくらい。他に増えるかどうかは分からない。

「そんなにいるの？……でも頑張れば何とか5時間大丈夫か」

単体でかなり強い。葉のけいこを観てこれを見ると絶望的だな。せめてミストラルがいれば……

あれ、かなりヤバい状況かな。

一気に来られたら負けること確定だつてことだよな。

せめて一人ずつ来てくれたら……あ、それでも駄目なんだっけ。

葉、ここはミストラルを呼ぼう。ぶつつけ本番で悪いがここを生き残るためだ、俺に続け

「え！呼べるの？わ、分かった頑張る」

我が身を守る守護者、最強の守護者をここに呼べ。名をミストラル、大罪の騎士。『大罪の書』の誓いを、主を守れ、守りきれ！

「我が身を守る守護者、最強の守護者をここに呼べ。名をミストラル

ル、大罪の騎士。『大罪の書』の誓いを、主を守れ、守りきれ！」
それにしてもあいつらなんで襲ってこないんだろう。
かなり無防備なんだけど、このまま何もしないで終わるってことも
期待していいかな？

魔力をかなり使うからそのつもりで。・・・大罪の騎士よ、参ら
れよ

そう言えば『大罪の書』って危ないんじゃないか？

そう言おうとしたら、目の前に魔法陣があった。

それを表現するなら巨大な力をまるで赤子の手を捻るかのように扱
っている『母』。

そう、なぜか『母』を想像した、何の迷いもなく、ためらいもなく。

ふう、どうやら成功らしいな。良かった

そこにミストラルがいた。

『母』は消えていた。

あれは錯覚なのかな。

「ここはどこです？今、アイスを食べていたのですか。それに主何
故こんな所に？」

説明は後だ、今はあいつらを相手しろ。葉では無理だ。今はいく
ら魔力を使ってもいい。お前の力を葉に見せてやれ

「・・・そうですね。主、これは稽古です。私の動きを見ていてく
ださい。では、『審判の剣』ミストラル行きます！」

そしてミストラルの稽古が始まった。

シルバー視点

さて現主人公はどうなったかな

時雨 光矢、彼は唐突に言った。

【チート付きの主人公になりたい】

頭おかしいんじゃないの、お前。

そう答えて主人公としてこの世界に放った。
今思うと葉はいらなかったのかな。

「どうせくだらないなら、面白い方がいいだろう。それで光矢はどうなったかな・・・お！いた。ジュエルシールド集めてるね。一緒にいるのはフェイトちゃんかな。マイナス10点、あと90点だね。ここはなのはちゃんの所にいくべきだったね。この世界の主人公達はどこかしらあれだからね。その中でもなのはちゃんは大変だ。どうするのかな現主人公」

説明はしたさ、ここでは行動に気をつけろってね。
それだけじゃ足りなかったらしい。

シルバーさん視点out

この世界ではすでに正史とは少し違う。

光矢の選択がこの先の未来を変えた。

良い方向なのか悪い方向なのかはその時になってみないと分からない。
い。

シルバーさんはこの世界に直接手を加える気はない。

傍観者として世界げんの上の役者を見るだけ。

ものがたり人生を作るのは役者の役目。

葉と光矢と原作主人公達。

原作知識は役に立つのか？

それは神をも知らず。

第10話

原作知識は参考程度？（後書き）

誰かチートの案を送ってきてくれないかな？

アニメとかの技とかでもいいので。

シルバーさん：次回、ミストラルはどれくらい強いのか！

・・・

シルバーさん：わぁおー、オール無視。大好きだぜみんな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4955u/>

魔法少女リリカルなのは 八神家の弟

2011年11月22日04時05分発行